第414号 昭和54年12月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年3月31日 第三種郵便物認可

1979年（昭和54年）
12月号（No. 414）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

珠穆朗瑪峰地区図（樋口敬二）……（1）
「チョモランマ地域の氷河と気候」
科学研究委員会講演会……（1）
泰山と禹歩　（藤島　玄）……（3）
自然保護
大正池の河川化と田代池の壊滅…（3）
東西南北……（4）
報告
鳥海山高山植物探索行……（5）
チョモランマ周辺の氷河調査について
支部長会議と懇親会……（7）
蝦夷お月見会（北海道支部）……（5）
第12回図書交換会……（8）
図書紹介……（5）
山日記'80年版のご案内……（10）
お知らせ……（5）（8）
会務報告・ルーム日誌・会員移動（9）（11）
図書受入報告（図書委員会）……（10）
カット／芳野満彦・宮下啓三・松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開設時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

中国科学院作成

珠穆朗瑪峰地区図

樋口敬二

この三月のはじめ、中国の蘭州にある冰川凍土研究所の施雅風所長から、「珠穆朗瑪峰地区図」が送られてきた。同研究所と中国科学院西蔵科学考察隊の編集で、一九七七年六月の印刷だが、日本に送られてきたのは、これが最初である。

施所長とのつき合いは、昨年の九月、スイスで開かれた世界氷河台帳研究会で会ったのに始まる。この会には、中国から施さんを代表として、同じ研究所の若手研究者である謝自楚、蘭州大学地質・地理学科の李吉均、蘭州外国語大学の余然と、合計四名が出席し、参加国の中では人数の多い方であった。一昨年から国際測地学地球物理学連合に正式に参加するようになり、それまでの空白をとりもどそうとする意気込みが感じられた。

李吉均さんは、自分も著者の一人だといって、『氷雪世界』（中国科学院蘭州冰川凍土砂漠研究所氷河研究室・蘭州大学地質地理系・共著　科学出版社）にサインしてくれた。一般向きの解説書だが、一番はじめに「雪花」の章があり私の恩師中谷宇吉郎先生の撮られた雪の結晶の写真があって、なつかしかった。

この研究会では、施さんが代表して、「中国における氷河の分布、特性、変動」などの研究発表をしたが、何しろ始めて聞くチベットの氷河の話なので、質問、討論が集中した。氷河と山のカラー・スライドはなかなかきれいであった。

私たちの「ネパール・ヒマラヤ氷河学術調査」が、ちょうど中国側の反対側の仕事にあたるために、施さん達は私に親しみを感じていたし、また同じ漢字民族なので、やはり何かと通じ合うものが多かった。以来、文通を続けていたので、「珠穆朗瑪峰地区図」を送ってくれたわけである。

はじめて見る多色刷の、ヒマラヤの向う側の五万分の一地図なので、大いに興奮し、すぐにお礼とともに、「日本の氷河研究者、登山関係者は、この地図に非常に関心を持っているので、入手方法を教えてほしい」と手紙を書いたら、七月になってさらに三部の地図が送られてきた。折から、日本山岳会に同峰の北側からの登山許可が下りたので、科学委員会の中

科学研究委員会第四回講演会

「チョモランマ地域の氷河と気候」

――中国科学院　施雅風氏――

十月九日（火）午後六時半から約一時間半、本会集会室で、中国科学院蘭州冰川凍土砂漠研究所々長・施雅風氏により表題の講演が行われ（中国語、通訳は日中文化交流協会の横山氏）、西堀会長および雪氷学会の樋口教授をはじめ三十名余りが出席して、講演後活発に質疑応答がかわされた。以下は講演内容の要旨である。

＊

チョモランマという名称は一七一四年の中国の地図に記されており、インド測量局によるエヴェレストの記載（一八五八年）よりはるかに古い。標高は最終的に、一九七五年の中国登山隊による測量データをも加味して、八八四八・一三メートル（青島における黄海水位を基準）とされている。

チョモランマ北面の気候はひとくちにいうと乾いていて寒い。登山基地にされるロンブク寺院（約五〇〇〇メートル）の年間平均気温はマイナス〇・五度、年間降雨量は三三五ミリである（一九五九年）。十一～三月の極寒・乾燥期と、六～九月の降雨を伴う季節風期を除いた四、五月および十月のみが登山可能

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

村純二理事を通じて、そのうちの一枚を参考資料として活用していただいた。

地図の精度について批評するのは私の任ではないが、先日、佐々保雄先生がこられた際にこの地図をお目にかけたところ、なかなかの出来とのことであった。多年、航空写真測量にたずさわってこられた先生のお言葉だから、中国の測量技術は高いというべきであろう。また、こんなくわしい地図を公刊する中国の態度は、せいぜい百万分の一の地図しか公表しないソ連の行き方と対照的で、国土の基本情報に対する考え方の差が興味深い。

科学研究委員会講演会

この時期は風もまた比較的弱い。北壁には幅広い降雨帯があり、六〇〇〇メートル地点で年間六〇〇ミリ程度であるが、この結果は樋口氏らの南壁での調査結果とも一致する。五月に七〇五〇メートル地点で午後二時の気温マイナス二四・五度、八〇〇〇メートル地点の風速二〇メートルという記録がある。

中国における登山の歴史はまだ浅く一九五六年に始まる。一九五九年にソ連との混成チームによるチョモランマ登山が計画されたが、翌六〇年にソ連が引きあげたので、結局、中国隊として三名が深夜登頂を果した。その後一九七五年には女性一名を含む九名が登頂している。

ロンブク寺院をベースとする登頂ルートは、寺院の裏手から始まって南へ向かうこの地域最大のロンブク氷河と、その上部で左折し東進している東ロンブク氷河に沿っている。両氷河には三つの特徴が挙げられる。まず、氷河舌端部が比較的安定している。その一因は末端が厚いモレーンで覆われていることにあり、従ってモレーン切断部には著しい変化がみられ、ことに東ロンブク氷河の露出末端部の後退は明白である（この部分の標高を記録して貰えると貴重なデータになるのだが――）。第二の特徴はセラック地帯の形成である。セラック地帯は、高さ一～五メートルで基部がつながっている小規模なものから次第に大きなものに、遂にはひとつずつ独立したピラミッドの乱立地帯に到る。これは氷河の位置と標高（すなわち太陽輻射熱の強さと気候の乾燥度）および氷河の動きの影響のもとに形成され、出現から消滅までのサイクルは五〇～一〇〇年、ヒマラヤのような大山脈の氷河にのみみられる形式である。特徴の第三は、氷形成作用の途中に表面溶解現象が認められることである。

＊

このあと、一九七五年の中国隊の登山活動を写したスライドで、氷河の様子が説明された。

（三枝礼子）

出席者（順不同）

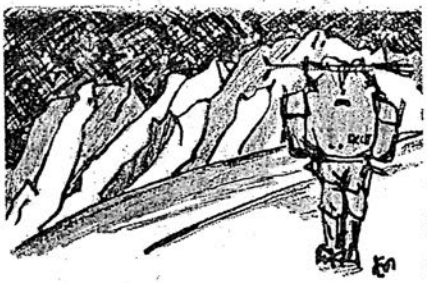
西堀栄三郎　樋口敬二　横川　健
藤井理行　島田　巽　川上　隆
三枝礼子　神崎忠男　折井健一
伴野　清　江本嘉伸　鈴木郭之
中村純二　遠藤慶太　金子雅信
藤井弘一　藤江幾太郎　山崎安治
金坂一郎　滝川憲治　出口　當
島田公博　中川　武　松丸秀夫
渡辺兵力　浜野吉生　伊丹紹泰
高遠　宏　大関　徹

泰山と禹歩

藤島　玄

八月八日、立秋の満月。泰山の登山口で標高約二五〇米、頂上約一五五〇米。高度差一三〇〇米は越後の二王子岳と粟ガ岳の中間の登りと見当をつけた。それが全登路が約七千の石段とは初めてであり、驚きであった。斎藤をチーフに最年長の私が七十五歳。金山と工藤の老人四名は最後尾となり、マイペースで登り出した。昨年のバイカル湖では下痢で悩まされたが、今回は極度の節食で下痢は防止したが、雨の北京で風邪を引いて了った。私の風邪は高熱でも頭痛がなく、日常生活では自覚症状がない。照りつける暑さは問題でないが、登り出してから鼻水が出て呼吸がならず口をあけて踉蹌、蹣跚の有様だ。約二千五百段の中天門に辿りつく。室賀隊長の先発隊は昼食をすませて出て行った。山田通訳と何嬢（カアさん）通訳が口論をしていた。どうやら、この老爺四名は保証出来ないから、ここで停止か前進かと云うことらしい。それは彼等の老婆心からの素人考えで、我々は登ると直ちに行動開始した。小鞍部から見上げると延々と一直線に登る石段は俄かに急勾配となり、気の遠くなる程だ。主稜上の南天門から下へ霧が漂い始めている。若い二人の通訳も先発隊を追って行って了った。

山スキー時代の私はいつもトップでラッセルした。重い荷と深い雪の中を一気に千米ラインまで突き登った。その苦しみを繰り返えすうちに、ある登行法を会得した。それは極めて簡単なことだ。或る歩数を登ったら必ず両足を揃えて止り、一息二息してから出ることだ。その繰り返しを自然に身につけて、滑らかにどれだけ続けられるかであった。この登行法を行うのに絶好の石段であるのに、先程までは調子が出なく苦しんだ。調子が出たので、三歩止りから八歩止りまで試みる。四歩か五歩止り位が楽である。若い斎藤は別として、同年代の金山、工藤も両足を揃えて止まり、二息三息して、止めた反対の足から踏み出す。いくらでも続けられる。南天門を通過、頂稜の緩登で頂上部の宿舎に着いた。霧の中の泰山頂上へ登る。この調子だとあと二時間位は平気と思ううちに石段は無くなっていた。宿舎に戻ると、先発隊は約三十分前に着いたが、登頂はしていないとのことだ。先発隊は若いが初心者も多いからである。



帰国後、記憶を頼りに探すと、「入山術」高瀬重雄著と云う古い本があった。必要点を摘録すると中国の葛洪は紀元四世紀の初めに活躍した人で、建武年中（三一七～三一八）に「抱朴子」をあらわした。抱朴子の内編「登渉編」に「入山術」がある。「名山に登るには入山の法を知らぬ者は多く、禍害に遇ふ。曰く泰山、華山の下白骨狼藉たり」とある。「入山に斎戒し秘祝を呪し、吉日を選び符、印、鏡を携行せよ」とある。葛洪の時代の千六百年も昔の中国は、儒教では聖人を目標に道徳教育を高め、道教では名山に登り、仙薬を服し不老長生の道を極める仙人を理想とした。抱朴子の目的もそこにあり、入山術の禹歩は泰山の石段登りに適応するが如くに記してある。「禹歩の法は右足を立てて前におく、次に左足を前におき次に右足を前にして左足を従わしめて併せて一歩とす。次に右足を前にし、次に左足を前にし右足を左足に従はしめて併せて二歩なり。次に左足を前にし、次に右足を前にし左足を右足に従わしめて併せて三歩なり」と。つまり一歩毎に両足を併せて止まる。一歩で止った時の「間」や整息などと、下山時の禹歩は記してない。併し私はこの禹歩の法を現代の登行法に応用することが考えられる。高所の登行、深雪のラッセル、高齢者の登山にこれを身につけて自然に滑らかに回転させたらと思って筆をとってみた。その気になって私の知る岳人の歩きを思いおこすと一世代も昔の小笠原勇八さんの流れる様な登り方が浮んでくる。ただ一度の出会いだが、こんな美事な歩き方もあるかと感嘆した鮮やかな印象がある。変形禹歩と見られるのに村井米子さんがいる。「入山術」の一読をおすすめする。

自然保護

大正池の河川化と田代池の壊滅

富田　健一

本年八月二十一日、十一号台風接近の影響で長野、岐阜両県を襲った集中豪雨は両県各河川流域に相当な被害を与えた。蒲田川流域、栃尾・蒲田温泉付近及び乗鞍スカイラインの土砂流出は人家の倒壊、死傷者行方不明者の出たことで、新聞にも大きくとりあげられたが、長野県側に於ても、特に上高地・槍・穂高ルートが多量の土砂流出、崖崩れで各所に被害が出ていた。たまたま数日を山研の厄介になるべく出かけた私は、その直後にであうことになった。島々から上高地までのバスも、途中沢渡でマイクロバスにのりかえ湯川渡を出ると、すぐに約一時間ストップをうけた。安房山稜線から約二百米位の大崖崩れが梓川右岸に多量の土砂を流した。山吹トン

～80・夏は≪8月8日(金)～8月22日(金) 15日間≫
ソ連・カフカスの山旅
⊙エルブルース山（5,633m）登頂（希望者）
⊙夏山アルペンスキー
⊙氷河と花の小旅行，その他多彩！
※カフカスはレールモントフなどロシア文学の郷里です。
＝ソ連の山と旅の専門旅行社＝
(株) 日ソ旅行社　政府登録一般第98号
案内書呈　☎ 404—1751(代)　担当：石元広昭
〒151 東京都渋谷区千駄ケ谷 1-20-1 パークアベニュービル。

ネル出口、坂巻、中湯付近でもその物凄さをみせつけられ息をのむ思いがした。

釜トンネルを出て暫く進むと、それでなくとも年々やせ細っていた大正池が、焼岳からの慢性的な土砂流入と、今回中央部及び北端区域で発生した六百山の山崩れによる土砂流入により池の形は全くみる影もなくなってしまっていた。これは霞沢岳三本槍付近の崩れがひどかったためらしく、八右衛門沢をなめ下して大正池に流入する前に、田代池をも一挙に埋没させてしまった。大正池が昔の姿を年々衰退させているというわびしさに加え、あの幽邃（ゆうすい）な日本庭園的姿で、慰めてくれた優しい田代池の姿がもう二度とみられなくなったかと思うと、同じ自然の働きとはいえ心いたむ出来ごとだ。焼岳の爆発で出来た大正池は元の梓川に復元した形かも知れないが（もっとも規模景観は爆発以前のものとは大きく変っているだろうが）田代池の消滅は大きな財産を失ったことになる。唯一つ明神池が、明神岳南面の崩れ（河童橋からよく見える）はあったものの幸い東面には大崩れがなく、昨年のままの明神池でいてくれたことで何となくほっとした思いがする。手許にある昭和初め頃の大正池と田代池の写真も大切な記念品になってしまい感慨深い思いがする。

黙々として修復整備にブルを動

今西錦司氏 文化勲章を受章
桑原武夫氏 文化功労者に

前会長の今西錦司氏は本年度文化人類学者として初めて文化勲章を受章され、会員桑原武夫氏はフランス文学・評論で日本文化の向上に寄与したとして、文化功労者に選ばれた。

今西錦司氏の受章祝賀会は京都市内都ホテルにおいて、12月17日本会会員も多数参加し、盛大にとり行われた。

『小島烏水全集』文部大臣賞を受賞
――造本装幀コンクール――

待望久しき『小島烏水全集』（全十三巻・別巻一）は、本会会員、島田巽、串田孫一、山崎安治、近藤信行（編集代表）の四氏によって編集がすすめられ、九月より大修館書店より刊行されている。

隔月配本なのでまだ二冊が刊行されたばかりだが、第一回配本の直後、第十四回造本装幀コンクール審査会（十月十八日）において第一位の「文部大臣賞」受賞が決定した。審査委員は、布川角左衛門（日本出版学会会長）小田切進（日本近代文学館理事長）司修（装幀作家）氏ら二十氏。

より美しく、よりよい本づくりを目標に出版文化の向上をはかろうとするこのコンクールで、本年の審査対象は、九十七社三百六十一点。そのなかから「内容的にも文部大臣賞に適しており、印刷、製本、デザイン、材料の選択などあらゆる面から最も優れている」として、授賞の決定をみた。

『小島烏水全集』は菊判函入、本文10ポ組。DPLクロス（ブラウン）およびバクラム（淡クリーム）の片継ぎ表紙装。題字は烏水翁の青年時代からの愛読書のひとつ『徂徠集』木版本より集字・整字したもので金箔二回押し、表紙カットには烏水蔵書票（織田一磨作）の白花石楠花が使用されている。愛書家であった著者にふさわしい豪華愛蔵本である。解題・解説は全巻をとおして近藤信行氏が執筆する。

入賞作および全作品の展示会は、十一月十九日～二十二日、東京日本橋・丸善にておこなわれた。大阪では一月二十八日～二月二日、博労町・丸善にてひらかれる予定。

会員だより

図書委員の北島光子氏はこの夏スペイン山岳連盟（F.E.M.）をマドリッドに訪ね、事務局長のフェリペ氏と歓談し、エヴェレスト遠征計画を聞かされた。この計画書は持ち帰って図書室に保管した。一九二二年に創立されたこの山岳連盟は傘下に一七〇ほどのクラブを持ち、山小屋は二十七、会員数は約七万六千人とのことである。

会員笹見愛子氏は、昨年夏はスイスのブリエンツロートホルンを、今夏はドロミーテンを、スイス人やオーストリア人と共に玩具のような汽車に乗ったり、ガソリンを気にしながらドライブをしたりして山巡りをやったとのこと。

新発売
高層天気図用紙
B4判2色刷
一冊五十枚 五〇〇円

山岳遭難の教訓
死なないための発想転換入門
四六判 1300円 出海栄三著

高層の天気
700ミリバール天気図の見方・書き方
丸山健人著
B6判 800円 付・高層天気図用紙（2色刷）

★ご注文は最寄り書店をご利用下さい。
岳書房（ヌプリ）
101 東京都千代田区神田神保町1-34 高瀬ビル
TEL 03-233-3909 振替口座 東京3-94529

かし、尚も崩れおちる土砂を雨合羽にうけ乍ら働く人々に頭の下がる思いだったが、大自然が一日荒れ狂うとどんなに大きな自然変化をもたらすか目のあたりみて、人力の弱さをひしひしと感ずるのだった。所々で建設省の改修五ヶ年計画の標板をみたが、果して効果ある計画なのか、自然保護に机上計画が幅を利かしていないか。予算の小刻み計上でたえず後手後手に廻っているのではないだろうかなど改めて色々考えさせられるのだった。

お知らせ

雪害実験研究所見学会案内

共催　科学委員会
　　集会委員会

長岡市にある科学技術庁の雪害実験研究所に見学会を行います。

見学後のエキスカーションとして松之山温泉に行きます。

雪害実験研究所の研究テーマ
○雪害の基礎的な研究
○雪害防止の理学的応用研究
○雪害防止の工学的研究
で登山活動に直接結びつくものではありませんが、雪の研究法を学ぶことができます。

エキスカーションの松之山温泉は豪雪で冬は以前は交通途絶していましたが今はバスが入ります。

日時　五五年三月一日（土）
午前、雪害実験研究所見学
長岡市栖吉町前山九六二八
終って、国鉄及びバスで新潟県東頸城郡松之山町の松之山温泉に行き泊。
三月二日（日）同温泉発
松之山温泉行には豪雪時の交通手段として、スキーとシールが要ります。

参加希望の方はハガキで本会まで御申込み下さい。

締切　五五年一月一〇日

詳細については御申込みの方に御通知いたします。

報告

鳥海山高山植物探索行

科学研究委員会

ヨーロッパでは、まず植物研究者がアルプスの山地にわけいって、地質学者がこれにつづいた。魔力を秘める醜いものとして敬遠されてきた山々から不幸な偏見がとりのぞかれて、山岳観光、そしてアルピニズムの時代がおとずれた。日本の近代登山史は、ヨーロ

図書紹介

EVEREST—IMPOSSIBLE VICTORY

BY PETER HABELER
TRANSL. DAVID HEALD

一九七八年、ラインホルト・メスナーとともに無酸素のエヴェレスト登頂を果したペーター・ハーベラーの処女出版。メスナーの名声にかくれた存在だった彼が、メスナーと数々の輝しい山行をともにするなかで、二人の対照的な性格をも浮き掘りにする。

一九七〇年のナンガ・パルバット登頂の際の弟の死、その翌年のマナスル登頂の僚友の死について世間のきびしい批判を受けたが、「この無情と憤怒はラインホルトを孤独な男に追い立てる。…そして過去につながる一切のものを破壊し、断ち切る。幼なじみも、妻でさえも…」、とエヴェレスト行まえのメスナーの心の遍歴。

一九七八年五月八日、午後一時十五分登頂。そのあとメスナーはハーベラーより三十分遅れてサウス・コル（C4）に帰着したが、雪眼に罹り、差し出された紅茶も見えない重傷。その夜「ラインホルトは苦痛に泣きうめいた。〝オレを一人ぼっちにするなヨ。頼む。一緒に居てくれ〟と幾度も懇願した」とメスナーの性格を出す。

エヴェレスト小史のなかで、ソ連のエヴェレスト登山を収めている。一九五二年のことである。この年はスイスがプレとポストに試みたが、ソ連は初冬を選んだ。三十五人のベテラン登山家を結集、軍用機五機を仕立て、モスクワーノボシビルスクーイルクーツクを経由してラサ入り。六人のサミッターが八〇五〇mに到達し、モスクワと直結の〝ホットライン〟（無電）で「二、三日中にも登頂する」旨の連絡を伝えて消息を断った。翌年も捜索隊が出されるが何一つ手がかりは発見されなかった。五二年といえば中ソ蜜月登山初期段階になるが、この登山は後日、責任者がきびしく追求されたことを付け加えている。（片山全平）

Arlington Books p. 223
原題 EVEREST-EIN UNMöGLICHER SIEG

エヴェレスト
——極点への遠征——

メスナー著
横川文雄　訳

一九七八年五月、オーストリアのヴォルフガング・ナイルツを隊長とするエヴェレスト登山隊は、東南稜より五月三日、八日、十一日、十三日と四回にわたりサーダーのアン・プーを含め九隊員が登頂するという成果を収めた。登頂ナンバーからいうと、一九六〇年の北方ルートからの中国隊の登頂を入れて、一九五三年のイギリス隊の初登頂から数え、第二十五、第二十六、第二十七、第二十八登であった。五月八日登頂したラインホルト・メスナーとペーター・ハーベラーの二人はエヴェレスト登山における大きな課題とされていた酸素なしの登頂を記録し、ヒマラヤ登山史上にエポックを画した。この報告を一本にまとめたのが本書である。

絶頂へのクライムについてメスナーは次のように書いている。

「ぼくの頭の働きはスイッチを切られたような死んだも同然の状態だった。魂だけは透きとおって、いっそう感じやすくなっていた。——頂上への最後の数メートルを登るのは、もうそんなに辛いことではなかった。やがて登り着いたぼくは、腰を下ろして両脚を深淵の上でぶら揺った」

それはすざましい登攀だったに違いない。

サウス・コルへの下降は夢遊病者のような状態で、頂上へ着いた時間もはっきり記録されて

ッパでの山岳開拓史の最終段階であるアルピニズムの直輸入からはじまった。日本山岳会をはじめとして、幾百幾千の大小の登山者の団体が、もっぱら登山そのものを主目的としてきたこと、自然科学的な関心がいつも付録同然であったことは否定しようがない。そういう事情をふまえてみれば、日本山岳会に科学研究委員会が設けられて、山岳に関する自然科学的研究の組織化がおこなわれようとしていること、さらに一般会員に科学する目で山岳に接する楽しみを啓発してくれようとしていることは、大いによろこばしい。

その科学研究委員会の主催で八月中旬に東北の名峰の一つである鳥海山への植物研究山行が催された。じつをいえば委員会の名にしても、「鳥海山高山植物探索行」という名称にしても、植物にうとい私をたじろがせなかったわけではないけれども、自分自身を啓蒙する機会をもちたい一心で同行した。そして単独で歩こうものなら気にもとめずにいたはずの一木一草に注目することの喜びを味わうことができた。教えられるところの多い二日間の山旅であった。

八月十一日朝に酒田駅に集合した参加者たちはチャーターしたバスで標高一〇〇〇mの大平山荘にはこばれた。山荘で荷を軽くした一行は午前十時に吹浦口の登山道を登りはじめた。小一時間登った標高一四〇〇m地点あたりから、次々とあらわれる高山植物に視線をすいよせられ、止まっては歩き、歩いては止まる。日本海から吹き寄せる湿気をせきとめて雲と霧をたっぷりとたくわえる鳥海山は、中々その頂上を私たちの目に見せてくれなかったが、雲と霧は真夏の日射しをさえぎって植物探索の歩みを快適なものにしてくれた。

第一日目の探索行は笙ヶ岳三峰から扇子森に及んだ。私たちがこの日に見た植物の名をいちいちあげる必要はあるまい。ただ、鳥海山ならではの三種の植物にとくに私たちの目と関心が注がれたことだけは記録しておこう。ウゴアザミ、オクキタアザミ、チョウカイフスマ。

大平山荘での夕食には地元の山形県遊佐町助役の佐藤氏、遊佐町企画商工課長の佐藤氏（会員）も列席して、日本山岳会が鳥海山に関心をもつことに歓迎の意を表した。

翌十二日は自由行動日ということで、鳥海山頂上をめざすグループのほか、日程や気分に応じて三つ四つの小グループをつくり、参加者たちは思い思いの方向に散っ

図書紹介

いない。

メスナーはこの遠征のあと、ミュンヘンに戻ると、すぐナンガパルバートへ向い、八月九日、ディアミール側からやはり無酸素で単独登頂に成功し、今年（一九七九年）の夏には六人の小パーティで世界第二位のK2に挑み、七月十二日、ミカエル・ダッハーと二人でまたまた無酸素の登頂をやってのけた。まさにスーパーマンといわざるを得ない。

こうしたあわただしい遠征のあい間に、よくこれだけの本を出すと感心はするのだが、やはりこのレポートも一夜づけでまとめ上げたという感じをぬぐい切れない。一九二四年イギリス隊のマロリーとアーヴィンの遭難など、戦前のエヴェレスト登山の歴史が前文で長々と述べられているところなど蛇足であろう。本文も現地でのテープ・レコーダーのやりとりをそのまま活字にしてしまった部分が大半で、まことに読みずらいし、冗漫である。また付録として、これまたエヴェレストの登山年表に多くのページをさいているが、これもこの本には不用と思う。

巨峰への無酸素登山の動機、死ぬ苦しみのクライムはよく理解出来るが、画期的な無酸素エヴェレスト登頂の報告書だけに、登頂後の医学的考察なども加えた、もっときめのこまかな本にしてほしかった。それが本書の卒直な読後感であった。

訳者と出版社の日本語版への努力には多いに感謝しなければならない。こうした不平がいえるのもそのおかげだからである。

（山崎安治）

原題 "Everest-Expedition Zum Endpunkt"

昭和五十四年六月一日、山と渓谷社刊、三一八ページ、定価千五百円。

わが登高行

三田幸夫　著

著者の三田さんが、山岳界における世界的存在であられることは、今さら申すまでもない。『わが登高行』上下二巻は、その大きな足跡を集成された、いわば山の自伝というべきものである。待望久しかったが、今回ようやく上巻が刊行された。まことによろこばしいことで、心からお祝い申し上げたい。

内容は「青春の山々」十二篇、「アルバータ遠征」五篇、「インド時代とその回想」十五篇の三部から成り、写真十八葉が挿入されている。

著者の筆致は、お人柄が示すように、穏やかできめ細かでありながら、要所要所の切れこみが深い。山に傾ける情熱が、どのページにも滲み出ている。「越後銀山平より会津の山旅」（一九二〇年七月）では、まだ登山者があまり入らない頃の旅が、草鞋で土を踏みしめるようにしみじみと語られ、続く「春雪の立山と剱岳」（一九二二年四月）や、「涸沢の岩小舎を中心としての穂高連峰」では、雪や岩の世界が展開される。そして「山岳部ヒマラヤへの歩み」は、槇さんのアイガー東山稜初登（一九二一年）を契機として、冬山への傾倒、更にアルバータ初登（一九二五年）を経て、三田さんの一九二六年から七年間のインド時代と発展し、現在に及ぶ。このインド時代の三田さんが、頻りにヒマラヤを覗んで居られたことは、この文にも掲出され、後掲の「インド通信」にも窺われる。外国パーティの活躍ぶりに切歯しながらも、その様子や装備など逐一故国の岳友に報告され、奮起を催促されていた。山岳部でカムチャッカ遠征計画が進行中ときいても物足りなかった、というところに焦慮ぶりが現れている。

アルバータの遠征記は、私は初めて読ませて頂いたが、実に羨しく、また自分も一緒に行動しているように楽しかった。そして、九人の登攀、ショルダー、落石の場面では、やはりはらは

て歩き、前日の植物探索の余韻を味わった。

この二日間の山行には、吹浦在住の高山植物愛好家の畠中善弥氏、酒田在住の植物研究家富沢襄氏、吹浦の鳥海山指導員高橋長助氏など、地元の方々の熱意ある教示が大いに貴重なものであり、そのおかげで探索山行が予期以上に豊かなものとなったことをぜひとも付言しておかなくてはならない。とりわけ八十歳の畠中老人は疲れの色ひとつ見せず、平均の登山者以上の健脚をもつ会員たちにさえ驚きと尊敬の念をおこさせたものであった。ここに私たちの良き同行者となってくれた地元の人々に対して、山行のリーダーであった中村純二氏になりかわって、あつく御礼申し上げたい。

（絵と文　宮下啓三）

●参加者（五十音順。*印は非会員）

*天城素子、網蔵志朗、網蔵卓弥、遠藤慶太、小原晴子、片岡博、門倉賢、久保孝一郎、隅部恵子、斎藤清吉、*佐藤岩雄、佐藤冨佐雄、沢井政信、*沢井陽子、塩場庄太郎、*杉山都子、関塚貞亨、*ハロルド・ソロモン、高橋長助、宅間清子、田中清子、*富沢襄、中沢光江、中村あや、中村純二、畠中善弥、林桂子、林稔、松丸秀夫、*宮城恭一、宮下啓三、村上勝太郎、山崎健

「チョモランマ周辺の氷河調査について」

――渡辺興亜氏講演会――

科学研究委員会

（要旨）

ヒマラヤの南側は一般に海洋性の氷河、北側は大陸性の氷河と考えられるが、ヒマラヤも東にくるにつれて両者の区別はあいまいとなり、チョモランマ周辺ではチベット型ともいうべき平衡型ないし餅型の氷河になる。それでも、傾斜の急なクーンブ氷河と傾斜の緩いロンブク氷河では差異があり、個性もあるので、ロンブク氷河の調査は大いに意義がある。調査項目として、東ロンブク氷河と西ロンブク氷河の勢力の消長、氷河地形、特に水流とデブリの構造、氷河のボーリング、できればO^{18}の調査。氷河末端付近のモレーン構造と歴史、さらに登山隊員によるノースコルでの降雪時3時間ごと30ccの雪の採集、その他が考えられる。長期にわたる国際的調査の一環としても成果を上げたい。

出席者（順不同）

名大助教授　渡辺興亜氏、渡辺慶太、道向和子、中沢光江、中村純二、鳥海山行参加者有志。

支部長会議と懇親会

折井健一

十月六日（土）～八日（月）に佐渡に於て開催された。

去る五月十一日の会員総会当日に開催された支部長会議の席上で、次の支部長会議はゆっくり時間をとって、支部長の外にも地方から参加して貰い、懇親会をかねて開催したらどうだろうかとの提案があった。そこで、この意を受けた越後支部が開催の手配を引受け、今回の段取りとなった。当時は予想をしていなかった衆議院議員選挙の投票日に当り、尚また宮崎国体の開催時期でもあったので、各支部長はじめ多くの方々も都合がつかず、参加者はきわめて少数になった。会期中も長雨にたたられて了ったので、予定した妙らした。「ベース・キャンプのある日」は、のびのびしたタッチで、正に陣中閑あり。マウンテン・ラビッドが冬ごもりの巣を作るべく、枯れた小枝を運んでいる。それを手伝ってやる情景が微笑ましい。

この時頂上に残した細川侯のピッケルについては、二十三年後登頂した米国人二氏が天皇のピッケルと早合点し、「アルバータ後日譚」を生じるのだが、この交流のための通信文の幾つかが挿入されていながら、全体を淀みなく読了させるのは、実に筆力である。

「流浪のブティア」の一文にも、私はいたく心を惹かれた。ブティアは、ヒマラヤのジプシーだそうである。ある夜、三田さんはシッキムの宿をふらりと出て、この一群の焚火の輪に入れてもらい、煙草を頒けたりして、談笑を重ね、しまいには合金製の安物の指輪や腕飾りを頒け与える。そして群れは健康的に踊る。翌朝、早い出発でそこを通りかかると、焚火の灰が白く残っていた。この一篇にしても、尼僧との出会いを描いた「シッキムのある夜」にしても、ツルゲェネフの作品に勝るとも劣らない香気がある。そして心の温かい人でなければ、こうした旅情は得られない。また、三田さんは話への導入が非常にお達者で、読む者は知らず知らず引きこまれてしまうのである。

「シッキムへの憧れ」「ダージリンふたたび」「思い出の人達」の諸篇は、一度訪ねた土地や、一度の出会いの人を、三田さんがどんなに愛され、大切にされるかを物語っている。

島田・近藤両氏の編集は、さすがに文の取捨選択や配列がすぐれていて、写真も内容にマッチしている。表紙カットは岳友の佐藤久一朗氏で、実にすっきりした出来である。見返しには著者のスケッチ、アルバータ東面及びカンチェンジュンガ山群の一角、が使われている。

下巻には、苦心のマナスル行や、滋味掬すべき「底倉記」が登場することと思い、その刊行を渇望しつつ、この拙い紹介を終る。

（川崎精雄）

図書紹介

A5版　本文四六〇頁　一九七九年六月　茗渓堂刊　定価三八〇〇円

見山から金北山の秋色を探る大佐渡山脈縦走も中止せざるを得なかった。併し詩情あふれる佐渡の旅は観光客の少いシーズンでもあり、我々としては充分に堪能する事が出来た。

第一日、両津港から直行した妙見山「白雲荘」の夜は地元の越後支部、佐渡山岳会の方々と懇談、親睦の実を上げた。特に金井町助役の北見伍一氏は雨の中にもかかわらず、清酒をさげて懇親会に参加され、また悪魔払いと豊年を祈る神事として、海外でも有名になった鬼太鼓を披露して歓迎をいただいた。

時折霧が晴れ、酔眼にも国仲平野をはさんだ真野と両津の灯が宝石の様に輝やいて見え、美しい夜が更けた。

第二日、平場の名所旧跡巡りは、しっとりとした雨の中で、マイクロバスには、佐渡山岳会の村川会長、藤井さん等が添乗し案内をしてくださった。朱鷺の舞うと云う「朱鷺の里」から、東光山「清水寺」と回った。京都の清水寺を模して建てられた立派な能舞台は室町時代を偲ばせた。日蓮上人の根本寺、順徳帝の真野御陵、妙宣寺の五重塔等の古刹から、江戸幕府三〇〇年の財政を支えたが悲話も多い佐渡金山を見学、尖閣湾を経由して入川部落の服部旅館に投宿。

第三日、「島の北端、大佐渡山脈が急斜して海に突入、日本海の荒波と対決して生れた自然の複雑雄大な景観」とガイドマップに記載の通りの、佐渡らしい風景の集約された外海府を一周して両津に出た。車窓から大野亀を見て、途中の願部落からは、海岸波打際の探勝歩道を足にも愉しませた。賽の河原の洞窟の辺からの二ツ亀の全貌は、正に海上に二匹の亀がうずくまった様である。今は枯れはてた草原も、カンゾウの花が来年もまた黄一色に染め出すであろう。

「ロッヂ二ツ亀」の前から再びマイクロバスに乗り、鷲崎から三十二粁の両津湾沿岸を一気に走り、両津に着いた頃には雨も上っていた。

二泊三日の間に越後勢の酒の強さを改めて知ったが、また懇談の中で、本会現在の状況で、出来ること出来ない事はあっても、参加会員の諸氏から種々の意見をいただき心強さを感じ、パイプが太くなった様な気がした。

参加者（略敬称）

（東京）成瀬岩雄、小倉厚、片岡博、折井健一

（信濃）奥原教永

（関西）金井健二

（福島）小椋利雄

（越後支部、佐渡山岳会）藤島玄、斎藤平七、井口正男、増子輝男、佐藤一栄、鈴木敏雄、山岸栄三郎、室賀輝男、藤井信、奥津五郎、柳沢一男、石坂一郎、石田国夫、村川経一郎、藤井与嗣明、志和良一

「蝦夷お月見会」

北海道支部

北海道支部の「お月見の会」も八回を数える。今年は小樽の天狗山に舞台を据え、十月六日（土）十六夜の名月観賞となり、地元会員各位の御尽力により、豪華盛大に行われた。折から雲も切れ、小樽港外、石狩湾から月が上り、天狗山スキー場にあるトレーニングセンターからは、海に照り映えた見事な月の出であった。

酌み交わすビール、お酒、ウィスキー、それに小樽在住会員、心尽しの手料理は、山海の珍味を見事な手捌きでこなし、女性会員に付け入るスキも与えない見事さであった。炉辺山話は、年長の木村会員「後方羊蹄山六月登山行」、井手会員「トムラウシ山クワウンナイ沢遡行談」で、皆煙に巻かれ若手（?）連中も顔負けの体……。

別室での支部山行記録映写会もメートルが上り拍手が鳴り止まない。夜も更け、月が日本海から天狗山一帯を照らし出す頃、三三五五寝に就く。翌七日は総選挙の日である。どうしてもお仕事のある方以外、余市岳へ誘い出す不老老人の言にのせられ、二日酔にも拘わらず七人の老若男女が山に向って出立する。

＜観月会出席者＞（順不同）木村利雄、井手貴夫、山川力、兼平治水、末岡睦、渡部盛夫、金田一勉、新妻徹、高沢光雄、浅利欣吉、大音師忠一、平野明、西信博、柳田凉子、赤石喜恵子、亀井秀子、三浦勝幸、加藤高志、土屋彦、平山久雄

第25回山スキー技術講習会のお知らせ

詳細は次号でご案内しますが申込みは12月25日より受付けます。

日時　昭和55年2月9日～11日
場所　鳥海山
人員　三〇人
費用　一万三千円
申込　日本山岳会事務局

（技術指導委員会　嵯峨野　宏）

お知らせ

「山岳」覆刻版	2年3号	2500円
〃　〃	3年1号	2500円
〃　〃	3年2号	2500円
〃　〃	44年1号	2500円
近代登山の先駆者たち		1000円

以上の送料は 200 円

山岳会会報「山」合本	301～350	5000円
〃　〃　〃	351～400	5000円

以上の送料は 300 円

●残部僅少　ご希望の方は事務局まで

第十二回図書交換会

図書委員会

恒例の図書交換会が、十月二十七日(土)午後二時から、六十人の来会者が集ってJACルームで開かれた。今年は、十九名の会員から和書二百六十五冊、洋書三十一冊、雑誌四百十九冊の出品があった。今年の特色は、雑誌が多かったことで、「岩と雪」の一号から七号（二万五千円）、をはじめ戦前の「ケルン」、「山と渓谷」、「山」、「岳人」、「山小屋」、「山とスキー」、「山岳」等多彩であった。

単行本で最も高値を記録したのは木暮理太郎著「山の憶ひ出」（上・下巻）の二万六千二百円、競争が激しかったのは今西錦司著「ヒマラヤを語る」の十二人だった。例年どおり箸を使って抽選を行ったところ、十一人が空くじを引いた後、抽選係の岩瀬晧祐さんの手に当りくじが残り、二千円で落掌した。その他、入札になったのは、東京帝国大学山の会編「剣沢に逝ける人々」（一万七千円）、槇有恒著「山行」（七千五百円）、田部重治著「日本アルプスと秩父巡礼」（五千円）、「山岳」昭和五十年（三千円）、R・C・C報告Ⅲ（四千円）等だった。

今回の総売上額は、四十四万七千三百五十円で、規定により、このうちの二〇％から必要経費を差

引いた額を山岳会ルームと図書委員会にご寄付いただいた。

（堂本暁子）

（出品者　敬称略、順不同）

・和書　故松本善二氏遺族、島田巽、山崎安治、土田新一、川崎精雄、宮下啓三、松家　晋、伊藤博夫、国見利夫、入沢郁夫、鳥居亮、菅野弘章、橋爪幸達、滝川清、長谷川恒夫、広島三朗

・洋書　中川恵資、成瀬岩雄、岡沢祐吉、泉　久恵

山日記 '80年版のご案内

山日記 '80年版　第45輯ができました。いつも赤い表紙で、同じようなものだと思われるかも知れませんが、実は毎年それぞれ編集委員が大変な工夫をこらしています。

'79年版と'80年の大きな違いは、いろいろ読者からの意見はありましたが'79年版で削除した〝登山のために〟を改訂復活したことです。

つぎに'80年版の内容を紹介しましょう。

■口絵　アムンゼン・スコット南極点基地で観測された、今話題の奇型雪の結晶（菊地勝弘氏撮影、説明）

■日記欄・予定欄　各所に自然保護の標語と山の名言を入れているのは例年通りですが、'80年版の特色は故中谷宇吉郎教授の「雪華図説」や「中谷の Ta-S ダイヤグラム」など実写真と対比しかつ説明をつけたものも入れています。

■天気図・方眼紙・白紙　例年の通りです。

■登山のために

・ヒマラヤの高山植物（津山尚）

・カール、その周辺（式正英）

・山の装備（堀田弘司）

・山の医学（中島道郎）

・山の気象（大井正一）

■登山便覧

・山小屋一覧・登山行程表・交通機関連絡先一覧・一七七で聞ける天気予報サービス・難読山名・五万分の一・二十万分の一地形図一覧・剣岳と谷川岳の登山規制条例・山岳保険・日本山岳会本部支部一覧

■見返し・裏表紙に

常用計量単位、七曜表（森下博三）等々ほぼ'79年版同様ですが、植物季節の表は「年最深積雪」の略図に変更しました。

以上です。

定価は昨年同様九五〇円に据置きです。どうか会員各位はもちろん、友人や恋人へのクリスマスプレゼント、あるいは進学、就職等のお祝の贈答品などにも広くご利用いただきたいと存じます。

（山日記編集委員会　小倉厚）

会務報告

11月理事会

（11月19日午後6時30分　本会ルーム）

・出席者　西堀会長、折井、渡辺各副会長、中島、飯野、中川、中村、小倉、鈴木、岡沢、山口、高本、高橋、菅沢、越田各理事、小原（勝）、片岡監事　金坂、大塚、村木、山崎、小原（晴）各評議員

・委任　大森、川上各理事

【議案】

▽小島烏水全集第6巻に対する本会推薦の件　（中島）

大修館書店より発刊の標記全集を本会で推薦する　承認

▽名誉会員及び永年会員の件　（折井）

名誉会員については、評議員会（11月19日開催）で次の方が推挙された。

佐々保雄、島田巽、水野祥太郎、佐藤久一朗の4氏

また、永年会員は橋本晋七郎、今西錦司、片桐盛之助、西堀栄三郎の4氏で、年次晩さん会の席上で正式に推挙並びに発表を行なう。

▽会計処理規程改定の件（飯野）

公益法人会計の関係で同規程を改定する　承認

【報告事項】

▽チョモランマ登山計画の件　（渡辺）

偵察隊の行動概要、現況報告

▽支部に対する入会金一部還元について　（飯野）

▽年次晩さん会について（中島）

▽UIAA退会の件。来年度からは日山協が加盟する　（鈴木）

評議員会

（十一月十九日(月)　午後五時、本会ルーム）

▽出席者　山本朋三郎、水野政博、朝比奈英三、織内信彦、太田敬、金坂一郎、小原晴子、山崎安治、大塚博美、木下是雄、高遠宏、西堀会長、折井、渡辺副会長、中島常務理事。

▽委任　野口秋人、伊達篤郎、田口二郎、望月達夫、近藤信行、河野幾雄。

▽出席評議員から互選に依り、織内評議員が議長として、議事を進行した。

▽議案

㈠名誉会員推薦の件、定款第六条第五項」の規定に基き、「名誉会員推薦等に関する内規」に依り慎重なる審議の結果、全員一致を以って、左記四氏を推薦することに決定。

会員番号　九六九　佐々保雄

〃　〃　一二二七　島田　巽

〃　〃　一二五九　水野祥太郎

〃　〃　一六三〇　佐藤久一朗

（略敬称）

㈡名誉会員推薦等に関する内規（昭和四十年十月七日施行）の改廃の件

右内規のうち「第四条、名誉会員は原則として、本会の役員または評議員の選挙対象から除外されるものとする」を削除することを決定。

㈢報告事項　渡辺副会長よりチョモランマ峰登山につき、偵察隊の行動並びに本隊派遣に関し、現在までの決定事項について報告があった。　以上

ルーム日誌（54年10月）

1日（月）　理事会

2日（火）　集会委員会

3日（水）　山研委員会

8日（月）　婦人懇談会

9日（火）　科学研究委員会講演会

11日（木）　図書委員会

13日（土）　理科大　集会

17日（水）　図書委員会　三水会

18日（木）　農大　集会

20日（土）　学生部女子部集会

23日（火）　自然保護委員会

24日（水）　図書委員会

26日（金）　学生部集会

27日（土）　図書交換会

29日（月）　婦人懇談会

10月の来室者五〇〇名

会員移動（10月）

改姓

六四一四　低藤京子→遠藤へ

図書受入報告

図書委員会

購入洋書つづき (昭和 53 年度)

51 Tilman, H.W., "Snow of the Equator" The Travel Book Club, 1940
52 Tucker, J., "Kanchenjunga" Elek Books, 1955
53 Tyndale, H.E.G., "Nanga Parbat Adventure" J. Murray, 1935
54 Unsworth, W., "Encyclopedia of Mountaineering" Robert Hale, London, 1975
55 Whymper, E., "Chamonix and the Range of Mont Blanc" West Col, 1974
56—70 Mason, K. (ed) "The Himalayan Journal Vol. 1-15" 丸善 (複刻出版). 1978
(18から51までは17から50と1番づつ若い数字に訂正して下さい)

昭和 54 年 1 月～3 月受入図書

1. 日本山岳会編「山日記 1979 年版」日本山岳会1979 (2冊)
2. 一原有徳著「あのころの山」北海道撮映社 (1976)(著者寄贈)
3. 渡辺宏之著「山のみえる町」屏風岩石材部 1978 (著者寄贈)
3. 前橋信次編「シルクロード事典」芙蓉書店 1978 (版元寄贈)
4. 佐伯邦夫著「実戦現代スキー」東京新聞出版局 1978 (版元寄贈)
5. はつしほ会編「句集 はつしほ 第3輯」はつしほ会 1978 (版元寄贈)
6. 安川茂雄追悼文集「蒼い星」長越蓉子 昭 58 (長越蓉子氏寄贈)
7. 「'78 日米民間環境会議報告書」日本側組織合同委員会事務局 1978 (版元寄贈)
8. 新貝勲著「わが心魂の K_2・この果しなき白き神々の座よ」創思社 1978 (著者寄贈)
9. 小倉厚「歌集・日本百名山・山男われ」小倉 厚 1978(著者寄贈)
10. 信州大学ガルワールヒマラヤ遠征隊 1975 編「KANDAKINI BASIN」信州大学上田山岳部 OB 会 1977 (版元寄贈)
11. 凌雪会編「穂高間の岳遭難報告書」凌雪会 1976 (版元寄贈)
12. 西尾寿一編「溪谷・5」西尾寿一 1979 (版元寄贈)
13. 鉄道同人カラコルム登山実行委員会発行「ブルボープラツア」1979 (版元寄贈)
14. 北大山の会発行「北大山岳部五十周年記念誌」 1979 (版元寄贈)
15. 越後宏治編「世界山岳地図集成・カラコルム・ヒンズークシュ編」学習研究社 1978 (版元寄贈)
16. 日本山岳会編発行「1978年海外登山隊報告書」1979 (版元寄贈)
17. 大阪大学山岳会編発行「時報・第 16 号」1978(版元寄贈)
18. 武藤昭著「穂高岳の岩場」山と溪谷社 1979 (版元寄贈)
19. 今西錦司著「山の随筆」旺文社 1979 (版元寄贈)
20. 相沢裕文著「極地に燃ゆ・にんげん植村直己」毎日新聞社 1979 (版元寄贈)
21. 渡辺宏之著「登山者のための生態学」山と溪谷社 1979(版元寄贈)
22. 鹿野勝彦著「ロールツリン・シェルパの経済と社会」人間博物館リトルワールド 1979 (著者寄贈)
23. 桑原武夫編「ブータン横断紀行」講談社 1979 (朝倉光男氏寄贈)
24. 日本ヒマラヤ協会発行「トリスル 28 日間」1979 (稲田定重氏寄贈)
25. 東京都山岳連盟発行「ヒマラヤトレッキング報告書」1979 (高橋定昌氏寄贈)
26. 長崎大学学士山岳会発行「Mt. McKinley 登山報告書 1978」1979 (本多夏生氏寄贈)

27～33 ヘディン探検紀行全集「1. ペルシャから中央アジアへ」「2. アジアの砂漠を越えて・上」「5. 陸路インドへ・上」「6. 陸路インドへ・下」「11. 熱河一皇帝の都」「13. シルクロード」「14. さまよえる湖」白水社 1979 (版元寄贈)

34. New Zealand Alpine Club "NewZealand Alpine Journal Vol. 31 1978" (版元寄贈)
35. C. Fraser "Avalanches and Snow Safety" John Murray, London, 1978 (購入)
36. R. Faux "Everest-Goddess of the Wind" Chambers, Edinburgh, 1978 (購入)
37. C. Krawczyk "Mountaineering : A Bibliography of Books in English to 1974" The Scarecrow Press, Metuchen, N. J. (U. S. A.), 1977 (購入)
38. Col. N. Kumar "Kanchenjunga" Vision Books, New Delhi, 1978
39. G.D. Abraham "On Alpine Hights and British Crags" Methuen, London, 1919 (購入)
40. P. Grham "Mountain Guide, an Autobiography" G.A. & Unwin, London, 1965 (購入)
41. A. Blackshaw "Mountaineering-from Hill Walking to Alpine Climbing" Penguin Books, 1975 (購入)
42. C. Meade "High Mountains" Harvill Press, London, 1954 (購入)
43. Major H. P. S. Ahluwalia "Higher than Everest" Vikas, New Dehli, 1974 (購入)
44. "Medical Plants of Nepal" His Majesty's Govt. of Nepal, Dept. of Medical Plants, 1976 (購入)
45. N.B. Thapa "A Short History of Nepal" Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu, 1973 (購入)
46. F.A. Collins "Mountain Climbing" John Long, London, 1923 (購入)
47. "Himalayan Endeavour" A Times of India, Bombay, 1962 (購入)
48. 孫慶錫 "That's the Himalaya" Sung Moon Gak, Soul, 1978 (著者寄贈)
49. C.W. Casewit "Montagues du Monde" Fernand Nathan, 1976 (蒲地辰彦氏寄贈)
50. M. Herzog "La Montague" Librairie Labrousse, 1956 (蒲地辰彦氏寄贈)
51. M. Fantin "Atlante Alpinistico dell a Groanlandia" 1969 (著者寄贈)
52. M. Fantin "Lhotse '75" Club Alpino Italiano, 1977 (著者寄贈)
53. M. Fantin "Pionieri ed Epigoni Italiani sulle vette di ogni continente" Club Alpino Italiano, 1975 (著者寄贈)

昭和 54 年 4 月～6 月受入図書

1. 大阪蒼稜山岳会発行「ブランカの巨人」1978 (平川仁士氏寄贈)
2. 日本勤労者山岳連盟発行「パビール峰登頂報告特集号」1978 (版元寄贈)
3. 三省堂編発行「コンサイス・日本山名辞典・修訂版」昭54 (版元寄贈)
4. 徳田富次郎著発行「朝鮮金剛山大観」昭10 (佐藤テル氏寄贈)
5. 馬場弘士編「アラスカ・マッキンレー峰登山報告書」Melco. AC. 1978 (編者寄贈)
6. 荒垣秀雄著「森や山河や海のつぶやき」家の光協会 昭54 (著者寄贈)
7. 橋本広著「山旅に描く一若き日の画帖より一」窓出版社 昭54 (著者寄贈)
8. 県稜山岳会編発行「白き山嶺—Dhaula giriV, 1971—」昭53 (日本山岳会信濃支部寄贈)

●あとがき　会報に投稿されるときは縦書きの原稿用紙に、できれば一行を15字詰として書いて下さい。字数を数え、上手にスペースに納めるにはかなりの時間を要します。せっかく良い原稿を送られても、このためにあと回しとなり時機を逸することがかなりあります。（編集委員　山崎安治　片山全平　近藤信行　堂本暁子　小倉厚　大森久雄　松家晋　岡沢祐吉）

昭和五十四年十二月二十日発行
102　東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　西堀栄三郎
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂